

昭和58年卒業

卒業アルバムより



1



2



3



4



5



平成5年卒業

卒業アルバムより



1



2



3



4



5





平成15年卒業

卒業アルバムより





有機生命体の細胞に

昭和58年卒担当 国語科 大野 国土



私には二つの岐阜高校が生息しています。生徒の頃の岐阜高校と、教員として勤務した岐阜高校です。

生徒だったのは昭和四十年から四十二年です。一年の時には岐阜県で国民体育大会が開催、当時の生徒会長が炬火最終ランナーでした。二年の時には校舎本館落成を待つて創立九十周年記念行事が開催。三年になると社会情勢を反映してか、校内の空気も微妙に変化し、出入口の壁に「エンタープライズ寄港反対」などの貼紙を目にしました。私はと言うと、苦手の数学から逃げるように、蒸気機関車撮影の無宿放浪の旅に出ていました。二月にはクラスのお別れ会があり、その後に友人と三人で正門内東側のガリレオ像(の手に「親単」を持たせようとしてしまいましたがそれではできません)の前で記念写真を撮影し、「キらば、さらば」と校門を出ました。その頃の学校は、後になくなったことがいろいろありました。学校周辺の下宿屋、自習時間が生じると時間割変更をして五時間目でそのクラスを放課とする「ほける」、長良川堤防中段の小径に並んで行う男子体育の

更衣、職員室前廊下の大学合格者氏名の掲示などです。

卒業後十年経った頃は、国語教師をしていました。初任校は斐太高校。やがて私は飛騨が気に入り、一生涯もうと決めていた矢先、皮肉にも岐阜高校に転勤の話があり、高山から故郷の笠松まで高校時代に乗っていた自転車で帰りました。昭和五十二年の春でした。

再び岐阜高校が生息し始めました。さすがに自転車通勤はできず、名鉄新岐阜駅と学校の間を、七年間毎日歩きました。八〇〇キロは歩いた計算です。転勤当初は恩師の姿は一人もなく、先に記したような母校の面影もなく、異邦人の気分でした。しかしその分、以前にはなかった行事が経験できたのです。寄付金だけ出して卒業してしまった林間学舎の活動も、前任校で山岳部顧問をしていたため毎年参加できました。また、五十三年春には野球部の甲子園出場があり、雪の舞う運動場での出場決定通知の伝達、一回戦の雨中での逆転勝利、二回戦では快晴の空に上がった相手の本塁打のボー

ルを、皆で「戻れ、戻れ」と押し返す仕草をしたりと、熱い体験ができました。五十八年の創立百周年記念行事も、昨日のこととして思い出せます。その翌春、「キらば」と二度目の別れでした。

二つの岐阜高校の間でほとんど変化のなかったのは、校舎と校歌と制服です。一年五組、二年三組、三年二組と生徒時代に身を置いた教室に授業で入る際は、感慨を催しました。その校舎も今やありません。校歌は生徒の頃から今に至るまで、「国家の為に明け暮れ学ぶ」の一節だけは小声で歌っています。

喫茶店でこれを書いている傍らに、たまたま居合わせた岐阜高校三年女子三人と一緒にいます。岐阜高校の空間に身を置いた人は皆、岐阜高校という有機生命体の細胞と化すのでしょうか。彼女たちも、あなたも、私もです。

大縄場 西野町 百錬剛

昭和58年卒担当 国語科 渡辺 正昭



岐阜市大縄場。西野町。これは岐阜高校の所在地、そして今は廃線となった電停名である。思い起こせば私はこの大縄場の地で十六年も過ごしていた。私の教員生活はこの大縄場の地で始まった。華陽高校である。当時は岐阜高校の校舎をそのまま使った夜間の定時制高校であった。

彼らは昼間働き、夜学が。いわゆる働きつつ学ぶ生徒であった。ここでの挨拶は「こんばんは」であった。あるとき彼らの願いを尋ねてみたことがあった。「もっと睡眠時間が欲しい」だった。私はここで五年間勤めた。学ぶこと働くことを新任の私は教えるどころかむしろこちらが教えてもらったような教員生活のスタートであった。

私はその後三校勤め、再び大縄場の岐阜高校に戻ってきた。赴任したのは昭和五十三年、この年、生田監督の率いる岐阜高校野球部は春の選抜で甲子園へ行った。三月二十八日、雨中、相手は和歌山の吉備高校、七回に逆転勝利、岐阜高校が全国津々浦々に高らかに響いたことは忘れられない。

思えば三十八歳から四十九歳までの十一年間、歴史と伝統ある岐阜高校で過ごせたのは私にとって実に幸せなことであった。

ここでは、担任の希望が多く、私は二年待ってやっと担任が回ってきた。そして三年間卒業まで持ち上がった。

それが五八期生である。何と三年生の担任は幸いにも三回も経験した。

チャーシューというこのころ付けられたあだ名を思い出した。それは私が職員室で昼食のラーメンを食べている時、入ってきた五八期生の女子生徒が教材にあったチャーシューを見て、「あっチャーシューだ」と言ったことから始まって、このあだ名は私が在任中受け継がれたようだ。

この五八期生文系の三年生担任だった時、地元大学の英文科志望がクラスの中で何と十人もいてびっくりしたりしたものであった。このクラスには卒業の時、「百錬剛」と書いた色紙を全員に配ったことを思い出した。

その翌年、初めて経験した三年の理系担任では半分ほどが医学部志望であったのに驚いた。また同じクラスから二人が自治医大希望で推薦書を二種類書くのに難儀したのが懐かしい。

十一年の在任中、趣味的な分野でも多くの先生との出会いがあった。書道では文化祭の職員書道展、夏休みの頃からの作品づくり、直前の裏打ち技術。連句・俳句では先達がいり、切磋琢磨の中、数人合同で句集を三冊出版。思えばワープロやパソコンもこのころがスタートであった。

最後にエレベーターもあり、吹き抜けの図書館が特徴の白亜の新校舎に生まれ変わった岐阜高校の益々の発展を祈念する。

アビリーンのパラドックス —「同調」の畏を越えて—

平成5年卒担当 国語科 田口 正芳



社会心理学に「アビリーンのパラドックス」と呼ばれる寓話がある。誰一人として本心では望んでいないにもかかわらず、家族全員が酷暑の中を数時間かけてアビリーンという土地に食事に出かけてしまうという話である。一人の何気ない「行こうか」という一言に、他の者たちは「きつと皆は行きたいのだろう」と胸中の逡巡をのみ込み、曖昧にうなずく。その小さな同調の連鎖が、やがて誰の意思でもない決定を形づくる。善意と配慮が皮肉にも集団を誤った方向へと導いてしまう—それがこのパラドックスの本質だ。

思えば、似た構図は私たちの身近にも潜んでいる。高校時代の文化祭クラス企画決定のホームルーム。沈黙に耐えかねた誰かの「演劇がいい」という提案に、反対する勇気も対案も出ぬまま、皆が口を閉ざす。やがてその沈黙は「合意」と読み替えられ、泥沼の準備

期間が始まる。その時教室の隅で覚えたかすかな違和感の正体は、押し殺された本音の残響だったのだろう。

大人になっても事情は変わらない。飲み会の店選びのような些事から、組織の命運を左右する意思決定に至るまで、私たちは「空気」という曖昧な圧力に従い、言葉を引っ込める。誰もが疑義を抱きながら沈黙し、その沈黙が賛意として数えられ、破綻の見える計画が承認されていく。傍から見れば滑稽に映るかもしれないが、こうした光景は決して稀ではない。

自分が意見を述べなくても、誰かが何とかしてくれるだろうという楽観。波風を立てたくない、孤立したくないという恐れ。もしかしたら自分の感覚こそ誤りかもしれないという疑念。それらが絡み合って私たちの思考を内側から検閲する。だが九九人が賛意を示す

ときにこそ、「ちょっと待ってよ」と声を上げる一人が望まれる。なぜなら、それは逆行ではなく、集団を無益な旅路から引き戻すための、理性的な勇気だからである。そして、そのように発言することが許される集団・社会であってほしいとも思う。

空気を読む技巧よりも、胸に芽生えた違和を感じる勇気を。アビリーンへ向かう無意味な旅を食い止める「健全な少数派」であれ。二〇二六年二月、暦の上ではもう春なのに、蒼鉛色の空の下で僕は静かにそう願っている。

時代をつなぐ希望

平成5年卒担当 社会科 林 雅浩



私は岐阜高校に二五歳から八年間お世話になりました。初任校であった定時制高校では、働きながら学ばず夜学生の担任をしつつ、採用教科とは異なる英語を担当していたため、県内屈指の伝統校である岐阜高校への内示は、まさに青天の霹靂。「自分に務まるだろうか」という不安もありましたが、「地歴公民科はゼロからの出発。初任者のつもりで」と覚悟を決めて臨みました。

以来、常に頭にあったのは教科指導のことでした。当時の錚々たる地歴公民科の先生方による感動的な授業に触れ、「いつかは生徒に認められる授業を」と励んだ日々でした。専攻である世界史を初めて担当したが、着任三年目の平成二年度。歴史に一家言ある二年文系クラスの一つわ者たちに囲まれ、鋭い質問や指摘に冷や汗をかきつつも、心底鍛えられた時間でもありました。教科として独り立ちできたのは、温かく導いてくださった先輩諸先生方と、旺盛な知的好奇心をもって学び続けた生徒の皆さんのおかげであり、今も感謝の念に堪えません。

また、七年間担任を務めることができたことも、大きな財産です。担任として関わった学年は平成三、四、六、七年度の卒業生。どのクラスも皆魅力的で、自分と同じように仲間を大切に、夢に向かって互いを高め合える素晴らしい雰囲気がありました。特に今回の幹事学年(平成四年度卒)は、初めての三年生を持ち上がった学年でした。受験という大切な局面で、一人ひとりが悩み考えながらも努力を続け、自身と向き合って進路を選択し、人生を切り拓いていきました。当時三〇歳だった私にとって、こうした姿に微力ながらも立ち会えたことは、「教師としての在り方」を見つめ直す大きな転機となりました。

振り返れば、目の前のことに精一杯で、失敗も少なくありませんでしたが、岐阜高校での経験と、卒業生や先生方との間で育まれたつながりは、その後の教員人生にとってかけがえのない礎となりました。本当に恵まれた時代だったと感謝しています。

その「時代」といえば、ベルリンの

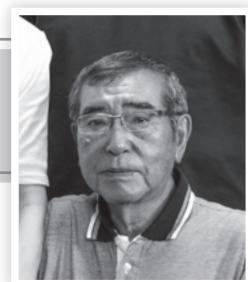
壁が崩れた当時は、それまで現代史を扱う際に感じてきた閉塞感が晴れたかのような思いを、冷戦終結後の世界への希望として語る事ができた時代でした。実際、海外に飛び出し報告を寄せてくれた卒業生もあり、そのスケールとバイタリティに岐高生の可能性を感じていました。

あれから三十余年。世界情勢は大きく変わりましたが、今の高校生たちは探求的な学びを通して、地域や世界の課題に対し、横断的協働的に解決する力を育んでいます。そこに私は新たな希望を見えています。

現在私は、大学で高校教師を目指す学生の支援に携わっています。今の時代に教師を志す彼らの姿は尊く、その真摯な思いに希望を感じながら、これまでの知識と経験を未来の教師たちに託していきたい、それが岐阜高校をはじめとする教育の世界でお世話になった者としての恩返しであると考えています。

楽しかった46年間の教員生活

平成15年卒担当 数学科 安田 恭章



先日、同窓会の連絡をいただいて久しぶりに教員生活を振り返りました。勤務した学校は下記の通りです。

中津高等学校(五年)

羽島北高等学校(一〇年)

岐阜高等学校(二年)

二年間のマレーシア勤務を含む

(籍をおいて勤務)

本巣松陽高等学校(四年)

大垣商業高等学校 定時制教頭(一年)

恵那高等学校 教頭(二年)

岐阜工業高等学校 副校長(一年)

坂下高等学校 校長(二年)

済美高等学校(八年)

教諭(二年)

非常勤講師(五年)

大半は羽島北高校と岐阜高校です。県立高校三八年の中で岐阜高校には実に一三年間席を置きました。平成四・五年度の二年間は当時の文部省の派遣でマラヤ大学に勤務しました。奥さんと小さな子供二人を連れたの一家での勤務は大変だった記憶があります。大学の数学の講義は日本語でしたので大丈夫でした。大トカゲのいる庭がなつかしく感じられます。

もどって一〇年間勤務しましたが楽しい思い出ばかりです。土足で歩き回った古い校舎、きれいとはいえないトイレ、今でも思い出します。

今の校舎とは全然違います。平成一二〜一四年度は学年主任でした。学校祭、スキー研修、センター試験の応援(応援団の水被り)、卒業式、好き勝手を言った学年集会、離任式の挨拶等々思い出します。ただ学年主任には担任がなかったので少しさみしい気がしました。学年の生徒全員の進路希望をかなえたいと先生方と協力して頑張りました。皆さんの卒業後あと一年学年主任を務め転勤したと思います。さみしくて車の中で泣いた覚えがあります。

私は六八歳まで授業をしていましたがその後は家にいます。趣味がないので困っています。現在は七十二歳になり年金生活です。薬は高血圧の薬だけ飲んでいきます。今のところ他に悪いところはありません。息子二人は家を出ています。普段は二人暮らしです。なかなか淋しいものです。孫はひとりで五歳です。遊びに来ると家の中がにぎやかになりいつも

りまわされます。女の子ですからかわいばっかりです。自分の子供ではないので責任感がないような気がします。あと何年生きられるか分かりませんが自分のことは自分でできることを目指して頑張ります。皆さんも健康に気を付けて頑張ってください。

愛すべきG高平成15年卒業生諸君へ

平成15年卒担当 地歴・公民科 吉田 益穂



高校時代、「倫理・社会」担当の先生が呼んでいた「G高」。G高こと岐阜高校に赴任したのは平成八年。八年在職し、概ね三〇代を岐阜高校で過ごさせていただいた。

平成一五年卒業生一二年入学生を担任したのは赴任五年目。学年を持ち上がり、二巡目であった。学年主任の安田恭章先生は直球勝負。高知県から人事交流第一号で谷村正道先生を迎えるなど、人間味あふれる先生方とチームを組ませていただいた。そして、個性豊かで、高校入試の時から元気のあつた生徒たちとの出会いがあった。

一二年次Ⅱ平成二二年度

西暦二〇〇〇年のミレニアムに本県で開催された「全国高等学校総合体育大会」。県内高校では、生徒も先生も「一人一役運動」として様々な形で参加した。この関係で、夏の林間学舎活動も日程が繰り上がるとともに、三泊四日から二泊三日へ、登山も西穂高岳から乗鞍岳に変更された。

また、次年度入学生から九州方面への修学旅行となったため、一年次

でのスキー研修(二月・志賀高原はこの学年が最後となった。例年に比べ体調不良者も少なく、医療機関の受診もゼロ。最終日にみんなが笑顔でスキーを楽しんでいた姿が印象的であった。

一二年次Ⅱ平成二三年度

特筆すべきは全国高等学校野球選手権岐阜大会での硬式野球部の、一八年ぶりのベスト四。四回戦では元巨人の松田宣浩選手がいる中京高を逆転で破り、準々決勝の岐山高戦も逆転勝ち。残念ながら準決勝で、優勝校の岐阜三田高(現岐阜城北高)に敗れた。この学年からも二年生ながら主軸を担う選手が活躍し、顧問の一人としても、ただただうれしかった。授業日より早く登校し遅く帰宅するような土日の練習試合を重ねたことも、こうした結果につながったと思う。

一三年次Ⅱ平成一四年度

この四月から週五日制が完全実施となり、本校は六五分授業の日課となった。A週・B週の異なる時間割に戸惑いながらも勉強に励んでいた三年生。「学海の波」は荒いものの、

最上級生として牽引した生徒会活動や部活動。岐阜祭ではわがクラスは「からくり屋敷」を企画。準備では休日にもかかわらず大勢が集まり、当日は汗だくになりながらもがんばった。

勉強だけではなく、「何事にも努力できる生徒」―前年度策定されたSー(スクール・アイデンティティ)が目指す「トータル・パーソン」にも似た彼らとの三年間は、とても楽しく、学び多き時間であった。

現在、可茂地区の進学校の教壇に立っている。二〇年ぶりの進学校の授業……岐阜高校の頃のプリントを見返しながら、時折当時を思い出している。平成一五年卒業生の諸君も責任を担う立場の年齢になっていると思うが、どうか「百分らしさ」を失わないでほしい。ますますのご活躍を祈念しています。

不協和音の世界に、歡喜の歌を
—私のフロイデ探訪記—

昭和58年卒

古川 克久



「フロイデ (Freude)」とはドイツ語で「喜び」「歡喜」を意味する言葉で、ベートーベンの交響曲第九番「歡喜の歌」の核となるキーワードです。昨年、私にとって、この言葉は新たな人生の扉を開く特別な響きを持つものとなりました。

最初の大きな「フロイデ」は、卒業以来初めて出席した同窓会でした。実に四二年ぶりに再会した同級生たちが、還暦を過ぎてもおお様々な分野でパワフルに活動している姿に、私は大きな刺激を受けました。この再会がきっかけとなり、こうして会報への寄稿という光栄な機会を頂けたことに、まずは深く感謝申し上げます。

そして、昨年の私の人生において最大の「フロイデ」となったのが、ベートーベンの「第九」合唱への挑戦でした。きっかけは昨年五月、六十一歳の誕生日に自らの「死ぬまでにやりたいことリスト」に、「第九を歌う」と記したことです。以前から興味はあったものの、未経験の不安から実行に移せなかったのですが、リストに記した直後にネットで「二万人の第九合唱団員募集中」の文字を目にしました。運命的なものを感じて応募したところ、幸運にも当選。「フロイデ」への旅が幕を開けました。

私が参加した「サントリー」二万人の第九は、全国から集まった二万人が大阪城ホールで声を合わせる壮大な演奏会です。八月

下旬から始まったレッスンでは、本格的な発声練習やドイツ語の歌詞に四苦八苦しましたが、同じクラスの仲間と励まし合う時間は、学生時代に戻ったような楽しさがありました。

レッスン後に仲間と連れ立って飲みに行くビールも、私にとっては欠かせない「フロイデ」のひとつ。合唱という共通の目標を持つ仲間と、疲れた喉を潤す乾杯は格別です。年齢も職業も異なる「合唱仲間」と、音楽について、あるいは人生について語り合う時間は、日常を忘れさせてくれる至福のひとときとなりました。

迎えた二月の本番。二万人の「兄弟」たちの声が重なった瞬間の、全身を震わせるような感動は言葉では言い表せません。「すべての人々が兄弟になる」という歌詞の通り、一人人がたった一回の合唱に心を結びつける。歌い切った瞬間は、凄まじい達成感とともに、この奇跡のような「一期一会」が終わってしまう寂しさが押し寄せ、気づけば涙が止まりませんでした。

テレビ報道の世界に身を置く私は、日々「分断と対立」が続く世界情勢を伝え続けています。だからこそ、あの時肌で感じた「人と人が歡喜でつながる世界」という第九のメッセージを、今こそ大切にしたいと強く感じます。世界の指導者たちがいつか同じ舞台で肩を並べ、この「フロイデ」を歌い合える日が来ることを願って。私はこれからも、第九をライフワークとして歌い続けていきます。

三年の学び、その後
に知った母校の誉れ

昭和58年卒

大須賀 千尋

(旧姓長谷川)



昨年還暦を迎えた。岐阜高校に在籍したのはわずか三年、人生全体の五%にも満たない。それでも節目ごとに、なぜか母校の存在を意識してきた。

就職活動の折、採用担当が偶然岐阜高校の先輩だった。「技術職でやってみなかい」と声をかけられ、縁もゆかりもなかった浜松へ移った。率直すぎる私に「ひやひやさせるなよ」と苦笑し、重たい判断に迷えば「俺ならこうするな」とにやにや背中を押してくれる。あの一言に何度救われたらう。会社人生の大半を百折不撓で歩んでこられたのは、この出会いを皮切りに続いた不思議な同窓生とのつながりのおかげである。

配属先の設計部門や異動後の知的財産部門でも、なぜか最初に出会い導いてくれるのは同窓生だった。ふとした岐阜の方言や、心を許すと急に饒舌になる気質に触れるたび、肩の力が抜けた。浜松は地元愛が強く、皆が母校を誇らしげに語る土地柄で、少し場違いに感じていた私には、その空気がことのほか心地よかった。

会社生活の終盤には思いがけない再会もある。特許係争の交渉相手として現れたのが同級生だったときは、驚きを通り越して思わず笑ってしまった。指導を仰いだ弁護士が後に先輩と分かったこともある。立場は違ってもどこか通じ合い、知恵を出し合って困難な案件を乗り越えられたのは、同じ校訓と校歌を胸に刻んだ同窓生だからこそだと感じている。

振り返れば、伝統ある岐阜高校に入れたこと自体がたどれなく(当時の学校群での振り分けの運も含め)、現実には山貞や親身に追われる毎日だった。PSSセミナーで出会った今の在校生のように高校生活そのものを味わう余裕があったかといえれば心もとない。それでも、あの濃密な三年間が確かに私の芯をつくってくれたのだと思う。

卒業すれば肩書きは消える。けれど母校とのつながりは、静かに人生を支え続けてくれた。小さな思い出と縁を大切にしながら、今度は私たちが次の世代に少しでも大きな傘を差し出していったら—そんな同窓生でありたいと願っている。

人が人を育てる — 岐阜高校の伝統を次の世代へ

昭和58年卒
長谷部 元靖



私は五七歳で
起業しました。
人の可能性を信
じ、人の成長の
お手伝いをさせ
て頂くことを目
的とした会社で

す。岐阜高校卒業後、慶應義塾大学経済学部に進学し、三井物産で三〇数年働いたのち、アール&エス人材開発株式会社を設立しました。現在は、企業の社長や役員、官公庁の幹部などを対象に、コーチングを提供させて頂いております。考え方の柱としているのは『論語と算盤』です。ビジネスと同時に、学生向けのコーチングもボランティアで続けています。

起業するにあたり、コーチングについて体系的に学びましたが、この仕事の原点は、特別な経営理論にあったわけではありません。三井物産時代から三〇年以上にわたり、大学の後輩たちが毎年OB訪問として私のもとを訪れ、就職、仕事、そして人生について相談をしてくれた経験にあります。次第に相談内容は、「自分は何者なのか」「何を大切にして生きたいのか」という、より本質的な問いへと変わっていききました。

そうした活動は今も続いており、最近では、岐阜高校出身で慶應義塾大学野球部に所属する鷺見君が、私のもとに通ってくれています。彼が私を訪ねてくれた

きっかけは、米子東高校出身で、慶應義塾大学野球部の先輩である森下君の紹介でした。森下君も、かつて私のもとに通ってくれた一人です。現在は商社で勤務していますが、以前、岐阜高校野球部の指導にも関わり、鷺見君にピッチングの指導をしていました。その森下君が、鷺見君と私をつないでくれました。

鷺見君は、岐阜高校で培った真面目さと素直さを持ち、慶應の体育会という厳しい環境の中で日々成長しています。海外で働くこと、商社で働くこととは何かを一つひとつ問いつつながら、自分の将来像を真剣に描こうとする姿に、私は大きな可能性を感じています。彼がさらに大きく羽ばたけるよう、自分の知識や経験、ネットワークを惜しみなく伝えていきたいと考えています。今後も多くの後輩との出会いを、心から楽しみにしています。

岐阜高校の伝統には、人が人を支える、次の世代へと志を手渡していく連鎖があると感じています。私自身、多くの先輩方に助けていただきました。防衛省を始めとする官公庁、商社やメーカーなど様々な企業様へご縁も諸先輩方のご縁の賜物です。岐阜高校から大学へ、そして世界へ。そんな循環を支える一人であり続けたいと、卒業生の一人として願っています。

岐阜高校の伝統を支えてこられたすべての皆様に、心から感謝申し上げます。

人を見つめ、人に見つめられて

昭和58年卒
俵木 恵子
(旧姓平田)



昨年一二月、
癌を患ったご主人の在宅看取りをやりきった奥様が私に
「こんなに二人

でゆっくり過ごせたことはなかった。幸せな二ヶ月半でした。先生や看護師さん、ケアマネさんとの出会いがあったからです。感謝しています。皆さんを見ていて、こんな生き方、人生があるのだなと主人は申しておりました。ありがとうございました。」

と言葉をかけてくれました。享年六二歳。同世代のご夫婦です。

私が訪問看護のケアマネジャーとなり一五年が経ちました。

学生時代は演劇に夢中になり、社会人になっても続けていました。当時はサラリーマン新劇劇団という劇団で(のちにラップ屋会社員をしながら舞台に立っていました。結婚をしても劇団制作という立場で二足の草鞋をはいて忙しく過ごしてきました。

自分の好きなことを第一優先する二〇数年でした。

大きな転機は出産でした。出産で生まれて初めて入院し、産科の医師や助産師に助けられ、保育園入園などで保

育士や看護師という専門職の方に出会い、人を手助けするプロの職業に就きたいと思うようになりました。四〇を過ぎて子育てをしながら、介護福祉士の資格を取り、ケアマネジャーとなりました。

利用者やご家族の声に耳を傾けるこの仕事は、母としての経験と、舞台上で培った人を見る力のすべてが生きる場所でした。現在は後輩を育てる立場にもなり、躓きながらも前を向く姿に、かつての自分を重ねています。

さらに最近ではかつて身を置いたラップ屋の手伝いも再び始めました。形は変わっても人と作品を支える喜びは今も変わりません。

振り返れば、どの選択も決して遠回りではありませんでした。同窓生の皆さんも、それぞれの人生を重ねながら、岐阜高校で養った強さを胸に自分らしい歩みを続けていかれることを願っています。

「公認会計士」に至るまでの岐路

平成5年卒
鈴木 康也

私は現在、大垣市で公認会計士・税理士として会計事務所を経営している。地元の中小企業を中心に、個人

事業者から医師、上場会社まで多岐にわたるクライアントの会計・税務・経営の支援に携わる日々は非常に充実しており、まさに天職だと感じている。私が公認会計士という職業を志したのは高校三年生の時であったが、振り返れば、岐阜高校での三年間における出会いと経験が大いに影響している。

一、二年生の頃の私は、硬式野球部の練習に明け暮れる日々を送っていた。疲れから予習復習を怠り、成績は常に四百番台。特に数学は壊滅的で、赤点回避が精一杯という状況だった。当時、天体や地球科学など地学に興味があった私は理系志望だったが、一年時の担任、加藤浩伸先生との文理選択面談で「その数学の成績で理系は無理だ」と一喝された。この言葉がきっかけで文系へと舵を切ったことが、結果として今の職業に繋がる第一歩となったのだから、人生は分らないものである。

その後、数学への苦手意識を払拭してくれたのが、二年生の担任、高橋勝美先生だった。赤点補講での教え方は驚くほど分かりやすく、あんなに苦戦していた数学が、受験時には得点源にまで成長した。さらに三年生で担任となった豊田治彦先生には、挑戦的な志望校に対しても「行ける」と強く背

中を押していただいた。先生方の厳しくも温かい指導がなければ、今の私は存在しない。

また、職業としての公認会計士を知ったのは、三年の同級生である伊藤弘徳君との会話がきっかけだった。彼が語る将来の展望に刺激を受け、調べてみると興味深い仕事内容であり、「自分も公認会計士を目指そう」と決心した。大学合格発表の帰り道、その足で簿記のテキストを購入したあの日の高揚感は、今でも鮮明に覚えている。

大学卒業年の秋に試験に合格し、一一年間にわたる監査法人勤務を経て二〇〇八年に独立。独立から一八年目を迎える今日までも、多くの同級生や先輩方に支えられてきた。同じ公認会計士である同級生の林享君には幾度となく的確な助言をもらい、また、同級生から役員就任・税務顧問の依頼や先輩から仕事のご紹介をいただくことも多い。岐阜高校の絆の深さを改めて実感し、感謝を申し上げます。

令和七年六月からは、日本公認会計士協会岐阜県会の会長という大役を仰せつかっている。一会員としての活動を超え、県内の全会員が地域社会にどう貢献すべきかを考える立場となり、自らの視野がさらに広がるのを感じている。

岐阜高校で得た「縁」が私を成長させてくれたように、これからは私自身が、母校や地域社会に対してプラスの影響を与えられる存在でありたい。「岐阜高校を卒業して本当によかった」——そう思ってもらえるような温かくなつながらを次代へと繋いでいくことが、今の私にできるささやかな恩返しではないかと考えている。

夢の舞台、東京オリンピックピックを支えて

平成5年卒
喜久生 健太

突然ですが、皆様は「ホッケー」という競技をご存知でしょうか。氷上ではなく、人工

芝の上で野球ボール大の球をスティックで操るスポーツです。日本ではマイナー競技の側面もありますが、ヨーロッパを中心に盛んで、オリンピック競技となっています。岐阜県はホッケーの強豪県として知られ、「スポーツ王国ぎふ」を支える競技となっています。

私自身は中高時代、卓球部に所属しておりましたが、父の仕事の影響でホッケーに興味を持ち、岐阜大学在学中の六年間はホッケー部で選手として汗を流しました。卒業後は縁あって、競技をサポートする立場となり、当初は県内の大会救護から活動を始めました。しかし、専任のスポーツドクターが少ない事情もあり、次第に日本ホッケー協会にてアンチ・ドクター活動や日本代表のチームドクター、海外遠征への帯同といった大役を任せていただくようになりました。通常の臨床とは異なる現場に戸惑いながらも、必死に経験を積み日々でした。

いつかはオリンピックのような大舞台に携わりたい——。そんな憧れを抱き続けていた私に転機が訪れたのは二〇一七年二月のことでした。東京オリンピック

の開催が決まり、一観客として楽しみにしていた矢先、日本ホッケー協会より「選用手用医療責任者」就任の依頼が届いたので。医療体制の構築からスタッフの選定、薬品・備品の準備まで、文字通りゼロからの立ち上げでした。夢が叶う喜びと、責任の重さに身が引き締まる思いで準備に邁進しました。

二〇一九年のテスト大会を無事に終え、いよいよ本番という時、世界は新型コロナウイルスのパンデミックに見舞われました。大会は一年延期となり、訓練予定もすべて中止。開催の目処が立たないまま時間が過ぎていきました。二〇二一年の開催決定後も、混乱する現場や未整備の医療体制への不安は尽きませんでした。「現地へ駆けつけ、自ら取り仕切るしかない」と覚悟を決め、夢中二週間を駆け抜けました。

結果として、同じ立場で私を支えてくれた父・明男や優秀な先輩ドクター、スタッフの尽力により、大きなトラブルなく大会を終えることができました。最終戦の終わりを上げるアンパイアのホイッスルを、安堵の気持ちで聴き、皆と喜びを分かちあえたことは、人生の宝となりましたが、同時に、ホッケーを多くの人に知ってもらい、満席のスタジアムで、誰かと国際大会の救護がしたいという新たな目標が生まれました。

学芸員という仕事

平成5年卒

梶山 博史



「学芸員」という職業をご存じでしょうか？私は現在、大阪市立東洋陶磁美術館というやきものを専門とする美術館で、学芸員として勤務しています。学芸員とは、私

が携わる文系分野の場合、美術館・博物館などで次のような業務を行う専門職です。

作品や史料を、①展示(館で開催する展覧会で)、②調査研究(作者や制作年代、形や文様の意味など)、③収集(美術商・収集家からの購入や寄贈など)、④普及(展覧会場やカタログの解説文、講演会などによる情報提供)、⑤管理(適切な温湿度に保った収蔵庫での保管、展示時の地震対策など)を行います。

私はこの仕事に就いて二十数年間、日本のやきものを中心に研究し、その成果をもとに展覧会を企画・開催し、専門書・一般書などに文章を執筆してきました。

岐阜高校の同級生や卒業生には、医師として人命を救い病苦を和らげる、あるいはエンジニアとして人々の暮らしを快適にする技術を開発するなど、様々な立場で社会に貢献している方がいらっしやると思いま

す。それに対して私の仕事は、果たして社会や人々の役に立っているのだろうか？、疑問に思うことがあります。そこで、今の私にできることは何だろうと考えた時、作品の魅力やおもしろさを分かりやすく伝え、きれいな、おもしろいと感じてもらい、つまり「心を動かして」もらうことではないかと思っています。

では、やきものの何が魅力的でおもしろいのか。やきもの独自の美しい色は、やきものを覆うガラス質の塗膜である釉薬や文様を描く顔料に含まれる金属元素が、高温焼成により酸化あるいは還元されることで現れます。

一方で、人類が普遍的にもつ生々しい欲望が、やきものの背景に存在していることでもあります。中国のやきものに描かれた蓮と鶯の図様には、「科挙」という国家試験に一発合格し、官僚として出世するという意味が込められています。江戸時代の大名には、幕府に目を付けられて藩が潰されないよう、領内で作らせた高級な茶道具や食器を、ロビー活動のアイテムとして幕府の官僚に献上した人たちが複数いました。商人や庄屋のなかには、本業とは別のベンチャービジネスとしてやきもの生産を始め、儲けようとたくらんだ人たちがいました。

我田引水でやきものを例に挙げましたが、ぜひ美術館や博物館に足を運んで、絵画・彫刻・工芸品など、様々な作品に出会って下さい。きっとそこには、好奇心をくすぐる未知との遭遇が待っているはずです。

在校時代の思い出

平成5年卒

西部 智子



私は、今は、兵庫県尼崎市に住んでいます。ひよんなことからお声かけいただき、原稿を書いていきます。お

声かけただいてから、原稿提出の(本当の)締切日である本日まで、つらつらと高校のことを思い出していました。その時間が今の私を元気づけてくれています。ご準備いただいている皆様、それと、高校時代を一緒に過ごしてくださった皆様に、心より感謝を申し上げます。

さて、「岐阜高校の思い出をいくつか挙げてみます。愚鈍かつ不義理な私にとって高校時代は既におぼろげで、思い出しても「ほんとは？」がいつぱいで、自分でも悲しくはあるのですが、それでも、同じ時を過ごしたみなさんと、少しでも、共有できたら嬉しいです。

○河川敷での授業(古文？現代文？)。そして、河川敷と言えば、増水後の石拾い！(今はさすがにできていないですか？)。
○勉強はほとんど分からなかった。正直、辛かった。ながせの豆单暗記はすごかった！

○社会のレポートで、やっさんが紙一杯に歌舞伎役者のような絵を描いてきたこと。自由でいいんだ、と思いたいとき、いつも思い出します。

○スポーツ大会？のドッジボールでの大活躍(自称)。

○山の家？の登山で、たかちゃんと山を走っておいしたこと、キャンプファイアと、あの不思議な建物。バスからの眺め。
○スキー合宿？とバレンタインデー。
○これらと共に思い出される青いジャージ。

○水泳にあまりよい記憶はない。
○旧体の更衣室。
○ハットリススポーツで揃えたカンサイのジャパンモデルのバスケットジャージ。
○なおちゃんのスリーポイントシュート。いつぱい練習したね。
○応援団(黄)。学ラン、柔道着、来たよね。楽しかった。貸してくれてありがとう。

○選択授業で行っていた美術室。
○三年の3学期に、林先生がみせてくれた映画「夜と霧」。
○湾岸戦争に抗議する文章？をみんなですったような。
○校歌を舞台で歌っていたみなさん。
○たぶん、体育館で映画をみたことがある。
○忠節橋から堤防沿いに自転車降りてくるところの坂。

○路面電車。
原稿の文字数が決まっているので、このくらいにします。

以上はほんの一部で、頭の中はもっと沢山のみなさんと出来事が浮かんでいて、みなさんに、感謝を(それと、お詫びもあるかも)をお伝えしたいです。そして、できれば、同窓会で、思い出話と近況をお伺いしたいです。

世界の酒が飲めるぞ

平成5年卒

金森 紀仁



お酒をいつから飲み始めたかはさておき、本格的にお酒に興味を抱いたのは大学に入学して

から。岐高では物理・化学を選択して生物には全く興味なく、現役の時は機械系の学科を受験した。浪人では化学系を受験し、そこにも落ちて最終的に工学部でも生物が学べるという学科に入学したのが始まり。この学科は以前は、発酵工学科という名前で醸造を専門とする学科だったということを知ったのは入学後で、大学の授業は微生物の発酵がほとんどだった。もちろん就職先はお酒関係の会社も多く、学科の社会見学？は発酵関係の会社がほとんどという徹底ぶり。サントリー山崎蒸留所では高級ウイスキーのがぶ飲み、アサヒビールや白鶴での飲み放題で、この学科の本当の魅力を思う存分に味わうことができた。

この影響で人生がお酒中心になってしまった：

大学院で留学したベルギーとデンマークでもお酒への探求が尽きなかった。ベルギーは小さな国土に1000種類以上の地ビールが存在し、すべてを制覇するためには毎日三本は飲まないといけない。結局、地方のマイナー

なビールまではたどり着けず一か月くらいで断念してしまったが、現地に旅行して珍しいビールに出会えた時は本当に嬉しかった。また、デンマークでは地元の自ビール倶楽部に参加して、造ったビールをメンバーと品評する充実した週末を過ごすことができた。

現在の勤務先である国際農林水産業研究センターに就職するとすぐにブラジルに向向を命じられたが、シユラスコにビール、そしてブラジルのカクテル「カイペリーニャ」を飲みながら同僚や友人と楽しい週末を過ごした。その後の南仏モンペリエの赴任では、週末にマルシェで食材とカーブでワインを買い込み、友人とアペロを楽しむことが仕事を全うすることができた。

こんな感じでお酒熱も最高潮になり、帰国後は日本ソムリエ協会のワインエキスパートや酒ディプロマなどお酒の資格を取得し、その縁でソムリエ協会誌に発酵(お酒?)の記事を執筆させていただいている。

現在、タイ・バンコクに赴任して二年になる。

皆さんはタイにも伝統的なお酒があるのをご存じだろうか？それは、もち米を使った醸造酒の「サトー」やそれを蒸留した「ラオカオ」。そんなお酒を毎日飲みながら、日々の生活を楽しくしている。

「肉のマルマン」のハムカツ

平成15年卒

祖父江 里奈



うのがいくつかある。

味の記憶は、美化されがちなものだとは思う。とはいえ、ときどき思い出しては強烈に恋しくなる味というの

私にとって岐阜高校の記憶と共に思い出される味といえば、お母さんが毎日作ってくれたお弁当、ぼんやり蛍光灯が点滅する薄暗い購買部で買ったチョコチップのパン、友達三人くらいでよく食べたキャッツカフェのデカイパフェ、駅前にできたばかりのスタバで初めて飲んだフラペチーノ。そして、いまだに恋しく思いうし出すのが「肉のマルマン」のハムカツである。

今はなき岐阜市内線(当時は市電と呼んでいた)の西野町駅を利用して通学していた私は、ちよつどその駅前にある「肉のマルマン」によく立ち寄っていた。精肉店だがコロッケなどのお惣菜も扱っており、注文してから目の前で揚げてくれる。新聞紙の袋に包まれた当時一枚三〇円のハムカツをほおばりながら、友達と市電を待っていたものだ。

卒業後、一度だけ肉のマルマンに行きたことがある。就職を目前に控えた二〇〇八年三月、私は岐阜高校にふらり

と遊びに行った。社会人になる直前に母校にもう一度行っておきたいと思ったのだろう。演劇部の顧問だった志比先生に会ったり改築前の古い校舎をのぞいたり。その帰り道、なんとなく肉のマルマンに寄った。高校時代とかわらない笑顔の素敵なおばちゃんがお店に立っていた。四五円に値上がりしたハムカツを注文し、自分が卒業生であること、在学中によくここでハムカツを食べていたことなどを話した。おばちゃんは嬉しそうに「みんな偉くなって遠くに行っちゃうわね。私はシワばっかり増えちゃって」と笑って言った。音を立てて油の跳ねるハムカツの前で、私は気付くと泣いていた。かなり泣きじゃくった。別に偉くなんかない。ただ私たちは高校を出て、大学を出て、みんなどこかへ行く。否も応もなく人生はその後もずっと続いていくし、その途方もなさに、切なさに、そして目の前にあるあまりに変わらないおばちゃんの優しい笑顔に涙したのだと、今では思う。熱々のハムカツは昔と変わらず塩気が強く美味しかった。

「肉のマルマン」のハムカツは今は一三〇円らしい物価高騰！。今年の同窓会での帰省を機に食べに行こうかと思っている。熱々のハムカツを口にした四一歳の私はそのとき何を思うのか、楽しみ半分怖半分である。

野球への情熱 〜岐阜から神宮へ〜

平成15年卒

五藤 崇史



人生の礎を築いてくれたのは、間違いなく岐阜高校硬式野球部での日々だった。

校訓である「百折不撓」。その言葉と共にグラウンドにはこの言葉がある。「情熱なき者は去れ。何事も礼儀から」。野球の技術よりも目の前の物事に対してどれほどの情熱を注げるのか。監督・先生・先輩たちが紡いでくれたこの教えは、単なる部活動の規律を超え、一人の人間としての在り方を教えてくれた。

〇一年と〇二年の夏の大会は今でも鮮明に思い出す。〇一年、私たちは、ソフトボールや巨人で活躍した松田選手を擁する優勝候補・中京高校と対峙した。六回終了までノーヒットと完璧に抑えられていたが、七回以降反撃に転じ八・六で逆転勝ちを取めた。その後下馬評を覆し一八年ぶりのベスト四へ進出した。あの夏の高揚感と球場の熱気は今も記憶に刻まれている。一方、〇二年、最後の夏は初戦の長良川球場で散った。三年間共に汗を流した仲間と勝利後の校歌を歌えなかった悔しさは今でも忘れることはない。

その後、目標は「甲子園」から「東京六大学リーグ」に変わった。聖地・神宮球場に立ち

たいという一念から、浪人という苦闘の末、長嶋茂雄さんの母校である立教大学の門を叩いた。ただ、周りには、PL学園、日大三高など、強豪校の選手たち。浪人した体は練習さえついていくことが出来なかった。四〇人以上いた新入部員は数ヶ月で二〇数名まで減り、私も退部を考えた。

しかし、その時頭に浮かんだのは、応援してくれた家族、そして岐阜高校の監督、先生、同期の顔だった。特に同期で慶應大に進んだ金本君・矢野君、東大に進んだ大西君が、同じ東京六大学リーグで頑張っており心の支えとなった。野球という「情熱」は消えることはなかった。

大学四年、四番の座を掴んだ。全試合出場しリーグ戦で本塁打王と打点王を獲得した。結果以上に、四番として出身高校の「岐阜」の二文字が各メディアに取り上げられることが何より嬉しかった。岐阜高校のグラウンドで共に汗を流した仲間、厳しい指導をしてくださった先生方、そして岐阜の地で培われた「情熱」が、私を神宮の四番へと押し上げてくれた。「岐阜」の名を背負い最高の舞台で戦えたことは今でも私の誇りである。

岐阜高校は創立一五〇周年を迎え、硬式野球部は日本最古と言われる。日本最古の野球部が、長年遠ざかっている甲子園へ出場することを期待しつつ、岐阜高校で学んだ百折不撓・情熱・礼儀をこれからの人生でも大切にしていきたい。

新卒三カ月での退職を経て

平成15年卒

尾関雄一朗



ここ十五年以上、フリーの上、フリーのスポーツライターとしてアマチュア野球（高校、大学、社会人）取材し、野球雑誌などで記事を書いています。また、スポーツ紙の公式サイトでも不定期で連載しています。記事がヤフーニュースなどで同時配信され、多くの反響をいただいています。

東海地方からプロ野球入りした選手はほぼ全員、アマ時代に取材しています。観客がほとんどいないマニアックな試合を、プロのスカウトと見に行くこともよくあります。

過去には、自分が発掘した無名選手をプロのスカウトに見てもらい、それがきっかけでドラフト指名につながったケースもありました。あるスカウトに「尾関君がスカウトをたくさん集めたから、あの子は指名されたんじゃないの」と言われ、お世辞と分かっていても嬉しかったものです（もちろん、選手本人の努力による結果なので、手柄を誇るつもりはありませんが……）。

さて、この原稿を書きながら高校時代を振り返ると、今の自分を形づくっているものに行き当たりします。日々の勉強に苦戦しつつも、国語の実力テストで学年四位をとれたときは、なんとなく自分の国語力に自信がもてました。文章を書く

今の仕事につながっています。また、アマ野球を見るようになったきっかけも岐高時代に由来します。私自身にプレー経験はなく、元々はプロ野球を見るだけでした。あるとき、クラスメートの野球部の子が二人、「ドラフト候補」として当時の雑誌に載りました（ちなみにその一人が、今号の会報に寄稿がある五藤君です）。以来、アマ野球観戦に一気にハマリ、結果的に今でも好きな野球に携わっています。

同級生にドラフト候補がいるというのは、強豪校でもない限りレアな出来事ではあります。ただ、岐高生の多士済々ぶりを示す証左とも言えそうです。

なお私自身は大学卒業後、ある全国紙の新聞社に就職しました。しかしこれがミスマッチで、三カ月で辞めました。「夜討ち朝駆け」という言葉どおり、新聞記者の労働環境は想像以上に大変でしたが、自分も覚悟がないまま就職してしまっただけで、最初の内定が出たという理由だけで、スポーツ色の薄い新聞社を就職先に選んでしまったのも短慮でした。

その後は雑誌への投稿を発端に、フリーでの執筆の機会がどんどん増え、今に至ります。単なる未熟さによるつまづきを「百折不撓」と呼んでいいのかわかりませんが、今後自分らしく頑張っていきます。

変わらぬ風景と、 これからの歩み

平成15年卒

永瀬 洋平



毎日のように長良川を渡り、学校へ通った三年間。当たり前のように越えた長良川や目の前にそびえる金華山は生活の中にある当たり前の風景でした。

高校卒業後は、進学と仕事のためにぎふを離れました。出身地の話題となり、いつも出てくるのは飛騨高山や白川郷、雪がたくさん降って大変だね、という話題ばかりでした。住み良く、自慢できるのに、当時はあまり知られていないことに「ぎぶってさういって」と勝手に思い込んでいました。一方、離れている期間が長くなるほど、当たり前に感じたものが誇らしく感じる様になり、ぎふに戻り、家業である旅館の仕事に携わる決断をしました。

旅館という場所にはさまざまな人が集まり、さまざまな時間が流れていきます。家族旅行の思い出をつくる方、仕事の節目で訪れる方、久しぶりに旧友と再会される方。そうした時間の一面に関わる仕事をしていると、人が集い、語らい、心を通わせる場所の大切さをあらためて感じ、この仕事に携わることの充実を実感します。

迎えた二〇二〇年。東京オリンピックやぎふの地がNHK大河ドラマのメイン



平成15年卒

永瀬 洋平

舞台となる大きな期待は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う様々な活動の自粛により、旅館業にとってこれまで経験したことのない試練となりました。人が集い、語らい、食事を共にすることを大切にしてきた私たちの仕事にとって、人の移動や集まりが制限される状況は、まさに根幹を揺るがす出来事でした。しかし同時に、その時間は自分たちの仕事の意味や価値を見つめ直す機会にもなりました。お客様が同じ場所で時間を共有し、心を通わせるひとときこそが、旅館という場の本質なのだと思えて感じました。思い返せば、「百折不撓」というどれほど状況が厳しくても志を曲げない精神を高校時代に培うことができたことが、あの厳しい状況の中にも負けることなく、立ち向かうことができたと思います。できない理由を探すのではなく、どうすればできるのかを考え、工夫し、実行する姿勢。そうした積み重ねこそが、困難な時代を乗り越える力になるのだと実感しました。変化の激しい時代だからこそ、目の前の課題に向き合いながら、一步一步前に進んでいくことの大切さを、あの経験は教えてくれたように思います。これからも、当たり前のようにそこにある大切なものを守りながら、人が集い、心を通わせる場所をつくり続けていきたいと思っています。

桜花の教え

平成15年卒

矢ヶ崎 礼香



同窓会誌への寄稿のお話をいただき、久しぶりに卒業アルバムを開きました。懐かしい同

級生の写真を眺めながら、同期のグループチャットでやりとりされるフランクな会話にまるで高校時代にタイムスリップしたような感覚になりました。

思い返せば高校生だった頃、将来への不安やプレッシャーから、進路を考えることは苦しい作業でした。反抗心と葛藤にうまく向き合えず、岐阜高校

が校訓として掲げる百折不撓・自彊不息の精神を体現することは私にはできないと思っていました。岐阜大学医学部に入學してからも、「何者になるのだろうか」という漠然とした気持ちは拭えませんでしたが、人体を学ぶうちに子供達を助ける医療に関わりたいと思うようになりました。卒業後、研修医として社会人になり結婚と出産を経験し、人生の方向性が見えてきた一方で仕事と家庭の両立に悩む日々が始まります。育児をしながら仕事について考え、仕事をしながら子供を思い、その日乗り切るのに精一杯でした。眼科専攻医となり、診療しながら眼科専門医を目指すことで、家族や同僚の



平成15年卒

矢ヶ崎 礼香

協力がなければ成し得なかったと今でも心から感謝しています。専門医と学位を取得後、やはり小児に関わるサブスペシャリティに携わりたいと意向を固めたところ、小児眼科および弱視斜視の分野を学ぶための米国留学のチャンスが巡ってきました。家族で渡米し生活を整えながら研鑽を積んだ時間は、禍福の連続でしたが一生の財産となる経験でした。帰国後現在は、一般眼科診療と並行して子供達の視覚を守るために貢献できる眼科医師を目指し、学びを深める日々を送っています。

こうして卒業二〇年以上が経ち、ずっと足元を見ながら一歩ずつ進んできたように感じています。今でも仕事と家庭のバランスに悩み、大小様々なミツシオンに突き当たり、時に恥をかきながらなんとか切り抜け一喜一憂する毎日です。そして漠然とした「何者になるのか」という気持ちは今も変わらず私の中に残っています。考えてみれば意外にも、愚直に生活を送り内省する上で百折不撓の教えは心を支えてくれる様な気がしています。これからも今までと同じように、迷いながら感謝を忘れず暮らしを積み重ねていきたいです。

令和8年度入試 大学合格者数

大学名	合格者数
北海道大	13
弘前大	1
東北大	2
秋田大	1
福島大	1
筑波大	4
千葉大	4
東京海洋大	2
電気通信大	1
東京大	16
東京外大	2
東京学芸大	1
東京芸大	1
東京科学大	2
東京農工大	2
一橋大	2
横浜国立大	6
富山大	1
金沢大	3
山梨大	2
信州大	2
岐阜大	37
静岡大	5
愛知教育大	2
名古屋大	37
名古屋工大	8
三重大	2
滋賀大	5
京都大	20
京都工芸繊維大	1
大阪大	16
神戸大	12
奈良女子大	1
島根大	1
岡山大	2
広島大	6
高知大	1
九州大	3
鹿児島大	1
国際教養大	1
福島県立医大	2
東京都立大	2
横浜市立大	1

大学名	合格者数
都留文科大	1
岐阜薬大	13
名古屋市立大	14
滋賀県立大	1
京都府立大	1
大阪公立大	5
神戸市外大	1
和歌山県立医大	1
下関市立大	1
九州歯大	1
酪農学園大	2
岩手医大	1
自治医大	2
青山学院大	19
北里大	4
慶応大	25
工学院大	2
芝浦工大	5
上智大	16
昭和医大	1
昭和薬大	1
成城大	3
中央大	25
津田塾大	1
東京電機大	1
東京農大	3
東京薬大	1
東京理大	60
東洋大	1
日本大	3
日本獣医生命大	5
法政大	11
星薬大	1
武蔵大	1
明治大	44
立教大	3
早稲田大	33
麻布大	1
マリアンナ医大	1
金沢医大	1
金城大	2
朝日大	6
岐阜女子大	1

大学名	合格者数
岐阜聖徳学園大	2
岐阜医療科学大	5
コー・イノベ大	2
愛知大	3
愛知医大	8
愛知学院大	5
愛知工業大	5
愛知淑徳大	2
金城学院大	6
椋山女学園大	2
大同大	1
中京大	5
中部大	5
豊田工大	9
名古屋芸大	2
名古屋薬大	1
南山大	44
藤田医大	9
名城大	92
皇学館大	2
京都産業大	1
京都女子大	1
京都薬大	6
同志社大	140
同志社女子大	4
立命館大	143
龍谷大	2
大阪医薬大	1
大阪音大	1
関西大	10
関西医大	1
近畿大	5
関西学院大	23
岡山理大	1
川崎医大	1
産業医大	2
福岡大	1
防衛医科大学校	2
防衛大学校	2
海外の大学	2

過年度卒業生を含む

令和8年度 同窓会総会運営委員会 名簿

担当部門	卒年	委 員					
運営委員長	昭和58年	山田 誠					
運営副委員長	昭和58年	石原 幸喜					
	平成 5年	伊藤 知子					
	平成15年	飯沼 威雄					
事務局	昭和58年	◎ 河田 誠	○ 大須賀千尋(兼)				
総務部会	昭和58年	◎ 大須賀千尋	○ 馬場美代子	今井奈穂美	小西 義一		
	平成 5年	○ 早矢仕英史					
	平成15年	○ 杉野 勇太	加納 裕久	杉山 博紀	長谷川智紀	松岡 康	長谷川貴昭
財務部会	昭和58年	◎ 尾藤 喜昭					
	平成 5年	○ 鈴木 康也					
	平成15年	○ 奥住亜矢子					
会報部会	昭和58年	◎ 服部 弘典	○ 西山光知子	市川ゆかり			
	平成 5年	○ 古田 希雄	杉山 千世	後藤 孝好			
	平成15年	○ 矢野 陽祐	伊藤 正人	岩井 周作	五藤 崇史	伊藤 海大	奥田 悠介
広告部会	昭和58年	◎ 秋山 晋	○ 加藤 雅也	安藤 弘道	鳥澤 昌紀	西田 泰幸	加納 克徳
		古田 充哉	後藤 尚己				
	平成 5年	○ 岡本 達明	尾関 光彦	白木雄一郎	岩佐 将充	加藤規子(兼)	浪上 主税
	平成15年	○ 永瀬 洋平	宮脇 慎吾	高井 克浩	浅野 祐樹	森 智雄	横山真之祐
動員部会	昭和58年	◎ 太塚 茂記	○ 遠藤 達也	若山 忠裕	野々垣貴美子(兼)	岩井久美子	谷畠進太郎
		山口 和也	澤田 悦子				
	平成 5年	○ 小林 直樹	加藤 規子	臼井 明	坂田 顕文	小川 貴彦	神田 和良
		石田成吏洋	上杉雄一郎	宮崎 富識	佐々木真喜子	加古 圭子	黒田 美千
		塩谷 大司	喜久生健太	上野真樹子	小岩 友美	大野健一郎	高橋 茂伸
	平成15年	堀 薫	白木 千鶴	林 享	鈴木みゆき	上田三知代	
		○ 金本 大策	安田 裕美	古谷 祥子	小林 佳代		
在京動員部会	昭和58年	◎ 中原桂一郎	○ 今井 巧	山内 恵介	川原俊太郎	堀江 和宏	榊原 清孝
		西川 聖一	鈴木 智史	中神 邦彰	富田 敦	森屋 和喜	古川 克久
	平成 5年	○ 長谷川友哉	清水 隆宏	篠田ゆかり	井上 達夫	島崎 猛	金森 紀仁
		中垣 滋紀					
平成15年	○ 金本大策(兼)	村井 直樹	大久保貴史	鈴木 健夫	山下 貴嗣	伊藤 裕子	
	浅野 和子	吉田 有佐					
会場部会	昭和58年	◎ 野々垣貴美子	○ 太塚茂記(兼)	森川 賢二	今井巧(兼)	平野千賀子	片桐 基晴
		渡邊 幸司	松原 潤子	松本智津子	川島 哲生	大野 隆俊	早川 信明
		藍川 竜磨	飯沼真理子	長谷部倫子			
	平成 5年	○ 浅野 拓郎	北川 輝信	木野村茂樹	大徳 康司	松原 啓泰	森本 貴生
		梶山 博史	小川 美穂	後藤ひとみ	後藤 兼寛	早川 真	矢崎 光洋
平成15年	○ 武井 健太	青木洋一郎	山本 昭仁	長澤 将大	市川 由佳	川田 久美	
監 査	昭和58年	毛利 泰康					
	平成 5年	後藤栄一郎					

※◎=事務局長、部会長 ○=副事務局長、副部会長

令和八年度 総会出席者名簿

■来賓	在京(首都圏)	岐阜高校同窓会会長	尾関 良平	(昭和37年卒)	岐阜市長	柴橋 正直	(平成10年卒)	岐阜高等学校校長	小野 悟	幹事学年恩師	日比野 安平	日下部 光穂	渡辺 正昭	小池 亮一	重山 武平	網野 俊六	瀬口 芳彦	田口 正芳	林 雅浩	丹羽 章	安田 恭章	田並 正	澤田 学	谷 齊	増田 俊彦			
■会員	吉田 益穂	谷村 正道	昭35年卒	武内 章	山内 英通	昭36年卒	松原 基明	昭37年卒	岡本 文吉	古谷 葉子	昭38年卒	葛谷 武彦	高井 宏康	丹下 忠彰	中谷 克彦	宮崎 千恵	昭40年卒	岩井 弘栄	山田 謙一	山村 哲朗	昭41年卒	石井 正志	江崎 雅康	桐山 直泰	古田 肇	新美 佐知子		
	昭42年卒	市川 治徳	後藤 三郎	滝 雅夫	則竹 晶	箕浦 洋和	昭43年卒	石田 栄	大野 国士	長縄 幸子	昭44年卒	河村 都以	松田 英文	昭46年卒	犬飼 重仁	大槻 俊夫	岡田 正昭	木方 伸一郎	伊藤 陽一郎	飯沼 克己	清水 富士夫	篠田 達郎	澁谷 英司	園部 利彦	羽田野 昭人	林 香余	松井 淳一	
	坂井田 勉	杉山 保幸	戸谷 哲郎	服部 哲明	松井 淳一	森岡 篤郎	昭49年卒	杉山 正裕	伊藤 容子	梅沢 敏郎	馬場 祐子	所 克仁	南谷 清司	遠藤 宏治	水谷 健	水野 耕司	三宅 雅之	昭50年卒	伊藤 陽一郎	飯沼 克己	清水 富士夫	篠田 達郎	澁谷 英司	園部 利彦	羽田野 昭人	林 香余	松井 淳一	
	松田 一雄	水野 勝仁	村瀬 幸雄	寺崎 曜子	昭51年卒	伊藤 武	木村 昭孝	神谷 眞弓子	坂井田 勝治	佐藤 通彦	棚橋 功史	棚橋 寛二	松久 卓	溝淵 健一	昭52年卒	野原 正美	広瀬 守克	昭53年卒	竹中 浩一	松山 高広	吉田 敦	吉田 万里子	昭54年卒	赤石 成徳	宇野 嘉弘			
	杉山 文康	昭55年卒	石垣 敦子	堀 貴雄	朝居 康浩	安田 章男	脇田 昌也	佐伯 淑子	平工 弥生	廣瀬 寛	昭56年卒	上村 修一	遠藤 康之	奥田 高志	三尾 剛志	永田 伸	奥田 勝彦	林 広樹	宇野 美津子	古川 真一郎	北村 多佳子	昭57年卒	梶山 記久子	山田 秀夫	松岡 正人			
	大西 公靖	矢本 哲也	森田 尚人	昭58年卒	青盛 克裕	赤井 昭彦	伊東 尚毅	浦崎 英治	大野 隆俊	加藤 雅也	加納 克徳	木本 毅	後藤 尚己	酒井 茂	関谷 隆	瀧口 博明	原 彰良	藤井 智幸	毛利 泰康	森 昇	森川 賢二	横井 大紀雄	餌取 英樹	大野 元	加藤 眞司	川崎 浩伸	河田 誠	小西 義一

山口 和也	森屋 和喜	秦 和樹	西川 聖一	谷畠 進太郎	棚橋 浩司	村上 真	國枝 義広	川原 俊太郎	大野 城二	今井 巧	石原 幸喜	安藤 弘道	浅野 英夫	秋山 晋	渡邊 幸司	山田 誠	山内 恵介	森田 良文	桃瀬 彰	宮田 達郎	堀江 和宏	古田 充哉	早川 信明	丹羽 央佳	西田 泰幸	中原 桂一郎	鳥澤 昌紀	豊田 隆雄	中神 邦彰	鈴木 智史	篠田 啓	小林 努
安田 千春	堀 正道	古川 克久	服部 弘典	富田 敦	高橋 克典	川島 哲生	藍川 竜磨	橋山 稔子	水野 裕美子	松本 智津子	林 美智代	川上 みな	各務 志保	岩井 久実子	吉田 正司	三原 昌弘	松井 伸一郎	平崎 誠司	篠田 雄大	加藤 雅也	大塚 茂記	西山 光知子	石塚 麻由美	小池 きよみ	大須賀 千尋	鈴木 智美	木村 いずみ	柴田 久美子	今井 奈穂美	井上 恭子	若山 忠裕	山田 清康
岡本 竜子	俵木 恵子	市川 ゆかり	西村 千秋	安田 光徳	長谷部 元靖	杉山 浩	片桐 基晴	大石 彰	野田 千恵子	松波 明美	柴田 尚美	高井 さとみ	土屋 裕睦	中村 浩隆	可児 德基	加藤 正樹	遠藤 達也	石原 永久	竹内 真奈美	山本 治代	小林 佳代	飯沼 真理子	林 良直	林 輝彦	小見山 知之	山田 恵	松原 潤子	前田 恵子	米野 香	馬淵 廣美	平野 千賀子	野上 亜利
河尻 香代子	松原 史尚	古川 竜太郎	柴田 朋浩	鴨島 功	吉田 淳司	横井 繁忠	武山 孝広	昭和59年卒	横山 里子	服部 輝子	藤田 美紀	長谷部 倫子	澤田 悦子	春日 涼子	渡辺 泰宏	佐藤 達治	榎原 清孝	岩佐 多喜雄	服部 裕子	野々垣 貴美子	吉村 君代	伊藤 由美子	木澤 あけみ	尾藤 尚美	石渡 瑞都	馬場 美代子	水谷 元哉	尾藤 喜昭	丹羽 健二郎	矢島 佳代子	小林 容子	
長瀬 嘉子	北川 英治	平成2年卒	土屋 勝裕	広瀬 修	平城元年卒	北川 千晶	澤田 大輔	小島 啓志	真鍋 隆	川田 啓貴	昭和62年卒	早川 徹	国井 重宏	昭和61年卒	武藤 玲央奈	栗山 尚子	吉村 光太郎	浅井 稔博	高橋 正章	桑原 賢典	三輪 高之	坂井 敏郎	中村 恵理	林 真奈美	上田 義広	若園 ちとせ	足立 葉子	尾立 葉子	林 幸代	高橋 浩子	新居 晶子	
坂田 顕文	今井田 一樹	井戸 真司	伊藤 優	浅野 元樹	宮本 順司	早川 真	杉本 誠	児玉 篤俊	栗本 一基	岡本 啓史	白井 明	阿蘇 仁志	平成5年卒	青山 正和	遠藤 久志	村瀬 範晃	武藤 玲央奈	栗山 尚子	吉村 光太郎	浅井 稔博	高橋 正章	桑原 賢典	三輪 高之	坂井 敏郎	中村 恵理	林 真奈美	上田 義広	若園 ちとせ	尾立 葉子	林 幸代	高橋 浩子	新居 晶子
西山 千佳子	吉永 麗加	飯島 尚子	黒田 美千	加古 圭子	川田 朋子	葛西 寿子	佐々木 真喜子	森 絵理子	深尾 瑞穂	宮崎 富識	大徳 康司	小林 直樹	木野村 茂樹	笠原 克明	奥村 隆之	上杉 雄一郎	岩佐 将充	石田 成史洋	浅野 英二郎	森本 貴生	長谷川 友哉	中垣 滋紀	白木 雄一郎	神田 和良	小川 貴彦	渡辺 博貴	松原 啓泰	間嶋 康夫	野田 英利	中田 智数	清水 隆宏	島崎 猛
後藤 智嗣	後藤 栄一郎	北川 輝信	川島 俊樹	粕谷 宇史	尾関 光彦	大野 健一郎	大澤 卓史	安藤 正信	浅見 武	小岩 友美	伊藤 知子	後藤 ひとみ	村瀬 晃二	岡田 烈司	井上 達夫	浅野 拓郎	片平 真規子	上野 真樹子	松尾 幸憲	藤井 淳	濱口 礼	岩尾 牧恵	堀 晃代	湯本 美樹	杉山 千世	福吉 明子	川島 里佳	加藤 規子	建部 英春	喜久生 健太	小野 龍人	塩谷 大司

編集後記

今回の会報部会では、今年度の同窓会テーマである「岐高生！伝統の継承、そして飛躍」と絡めた内容にしたい、という思いがありました。このテーマは創立一五二年目を迎えた岐阜高校ならではの長い歴史、脈々と引き継がれている伝統、そして岐阜高校で学んだ同窓生の活躍、さらには未来に羽ばたく現役生をイメージさせてくれました。

そこで、現役生にもご協力いただき、岐阜高校の今昔を比較できるような特集を組ませていただきました。特集1では部活動の視点から先輩(同窓生)と後輩(現役生)の活動の様子を、特集2ではご家族の中でも3世代の学生生活の違いを楽しんでいただくような記事にしました。特集3では二〇二五年の歴史に残るイベントである大阪・関西万博をとりあげさせていただきました。万博に岐阜高校の卒業生が関わっているかどうかは未知ではありましたが、多くの方のご協力で、該当する同窓生にたどり着くことができました。あらためて岐阜高校の繋がりと絆の凄さを実感いたしました。

さらに、今回は、会場部会とも連携し、当日のアトラクションと特集記事のコラボレーションもしております。アトラクションをみる前でもみた後でも、会報誌を楽しんでいただけたと思います。同窓会当日は旧友の方々との交流がメインになると思います。ご自宅に戻られた後にも、隔々まで興味深く読んでいただける会報誌ができたと自負しております。是非大切に持ち帰っていただければと思います。

ご執筆いただきました恩師の先生方、同窓生の皆様、部活動の卒業生ならびに現役生の皆様、運営委員会の皆様、本当にありがとうございます。会報部会を代表して御礼申し上げます。

令和八年度 会報部会長 服部弘典

▽広告ご協賛の

御礼

広告ご協賛を賜りました皆様のご厚情を掲載させていただく会報を無事、完成させることができましたことを、ご報告させていただきます。

なお、ご紹介順序は会報の構成上、原則的に順不同とさせていただきます。何卒ご理解いただきますようお願い申し上げます。

令和八年六月七日

岐阜県立岐阜高等学校同窓会
令和八年度総会運営委員会



令和八年度

岐阜県立岐阜高等学校同窓会総会

会報

■発行

令和八年六月七日

■編集

岐阜県立岐阜高等学校同窓会

令和八年度総会運営委員会

■印刷

ヨツハシ株式会社